

Q：今日や以前からお話を伺っていて、自分と重ね合わせて気になることがあります。小池さんが仰っていた体系的に理解したい欲だとか、

A：はい。

Q：複雑な理論をついつい考えてしまう、

A：うん。

Q：というのはまさに自分のことだな、と思って今日の話聞いていました。というのは…

A：ちなみに今日の話はあなたのことを指摘しようとしていたわけではないですから安心してくださいね。

Q：はい…。私は昔から、とにかく本を読むのが好きで、

A：うん。

Q：なかでも、理論的な本というか、いわゆる思想書、人文書、小説もそうなんですけど、非常によく読むんですね。

A：うん。

Q：何でもかんでも言語で、理論立てて考えたりとか、体系的に理解したりする癖があって…

A：はい。で、その理解されていない領域があるのが嫌で、しらみつぶしに言葉ですべての領域を覆いつくしたいという…

Q：仰る通りです。ですから、哲学に向いているところがあると思うんですけど、

A：はい。

Q：大学でも哲学を勉強していたりもして、でも、その道に行かなかったのは、難解な本が理解できたりとか、それによって人と話したりすることで、ある種の満たされる感じはあるんですが、

A：ええ。

Q：一方で、とても苦しいというか閉塞感みたいなものを、常に覚えるというか感じていて、

A：はい。

Q：常にその両方が自分の中であって、

A：うん。

Q：こういうところに通うようになって、そういうのは中和する効果があるというか、

A：はい。

Q：坐禅を組むのもそうなんですけど、

A：うん。

Q：そういうのを自分でやらないとほんと、楽しいことやっていたはずなのに、いつの間にか苦しいことになっていたというか、

A：はい。

Q：ジレンマというのがあるって…

A：ええ。

Q：小池さんもプロフィールを読むと昔哲学をやられていたっていう…

A：仰る通り。

Q：それで、関係あるのかな、と。

A：はい。

Q：言語にどっぷりつかるとは良くないことなのか、というか、自分は向いているのか、本当は楽しくてやっていたのに、

A：はい。

Q：いつの間にか、ある種の苦しみというか、そういうことによる、

A：うん。

Q：人間関係ももしかしたら、ネガティブな影響があるんじゃないか、とさえ思うのですが…

A：ありますよ～。

Q：その辺はどうなのでしょう。

A：はい。ああ、それはあなたの場合、哲学で、というご質問でしたけれども、他のかたがたにと

っても「自分が好きでこれをやっていたはずなのに、いつの間にか重荷になっているな」と重ね合わせられるものがきつといろいろあるはずですから、幅広くお答えしたいなあ、と思いますけれど。

一つ言えるのは、「好きでやっていたはずなのに」というのはどの時点まで遡って、「どの時点で好きになったか」ということが、どの人にとっても本当はあると思います。ある瞬間、哲学っていいな、って思ったとか。サッカー好きだな、って思ったとか。ある瞬間、絵を描くっていいな、自分に向いてるな、って感じたとか。ある瞬間、エステシャンって自分に向いてる、人にマッサージをするのが向いてるな、って感じるとか、発電機を作る・そういうのを作るのが向いてるかもしれない、とか。「あ、これいいな」と感じる時に、何かそれを「いいな」と感じさせる原因があるはずなんです。原因というのは、対象にあるわけではなくて、この心の中のほうに、それが「欠けている何かを埋め合わせてくれる」と感じさせるような何かがある。例えば、サッカーしたらほめられたとか、絵がおじょうずね、と承認されたことが気持ち良かったとか、そうした場合は、慢心がうずいたのが原因で「好き」が作られたのです。

で、哲学に関して言えば、理論的に理解できたり、しらみつぶしに分からない場所が分かたり、ということがうれしく感じるというのは、誰しもその気(け)はあるのです。その人の分からないことを分かる状態にさせてもらおうと、誰しも喜びを感じますし、「これが何か分からない」という状態は、嫌なものです。分かりたくて分かりたくて、はあはあしているものです。それはあると思うんですけども、ところが、ある種の人にはそういった、心の中の分からないことが説明されると、「あ、そうなんだ」とすごく喜びを感じ、また別の人の場合は、「あ、そんなもんか」というぐらいだったりする。これにものすごく強く喜びを感じるという場合に、ではその背景にあるのは何なのかな、と考えると、分からないことが暗闇の中を歩かされている

みたいで、ものすごく不安で恐ろしい、というか、心がグラグラしていて、恐怖みたいなものを感じているんですね。で、その恐怖をなんとなく解決してくれるように見えるのです。という意味で、そのことを好きになって、「これが本当に向いてるな」と感じたり、「本当は好きだったはずなのに」という「好き」の背景にあるのが実は恐怖だったりするので、「本当に好きなのか」というと「好き」というより怖いんですよ、実は。

ところが、その理論的にどれだけ組み立てたもので、完璧に組み立てられたもので、それが仮に事態を正確に説明していたとしても、それを分かった気になるというのは、心の中の働きで言えば、欲望が働くだけのことなんです。実は。「いい情報が接触した、なるほどな」と思って、喜びが生じるという欲求の状態に入っているだけのことで、そのことによって、「自分の心の中で、今何が起きているか」ということが分かるわけではない、ということ。「一般的に人間というのはこういうふうになるんだな」とか、「一般論として人間の認識構造はこうなっている」とか、だから自分もそうだろう、という推論は成り立つんですよ。推論は成り立つだけに、一時的に「あ、そういうことか」と腑に落ちたりしてちょっと自分のことが分かたりもするので、「私の現状」というものに切り込むような理解であるに依じて、ほんのちょっと、ここでトレーニングしている内面への気づきのようなことも生じるので、それは心に多少良い変容をもたらすと思うのですが、ただそういった「なるほどな」という知的理解というのは9割8分くらいは一般論なので、それが、「今自分が何を感じているか」ということは分からせてくれないんですよ。例えば、「あ、なるほどな」と思ったときに、人はこのように情報を認識してこう反応するからそれがこうなっている、という認識論を勉強したとして、「なるほどな」と思ったときに重要なのは、「なるほどな」という今起きてることは欲望で、この読んでいる本というのが情報で、まさにその本の情報が心に接

触して、それに対して快樂が生じて欲求が生じているな、という今の自分のことを分かる、ということが、気づきをもたらして、本当の意味での闇を、光をあてて照らしていき、本当に隈なく分かっていく、ということにつながります。ただ、仮に哲学の種類が仏教哲学であってすら、その一般論として言われていることを理解して「なるほどな」と思ってもそのときに働いているのは、「今、何が生じているか」ではなくて、「分かった」「分かりたい」という欲望が働くことによって、結果分かっているのかということ、でも今、分かりたいという知的欲望に駆られているんだなあ、という「今、ここ」の己の現実を分からなくなってしまうですね。

Q：そうですね。

A：はい。という意味において、実は闇が増えるんですよ。その知的な理解を増やせば増やすほど、それによって「正解を求めたい」という煩悩が増えていく結果として、「本当に何が今うごめいているのか」ということがどんどん闇になっていくので、表面上、その「知りたい」「分かりたい」「正解がほしい」という欲望が刺激されて、欲望に基づく気持ち良さが生じて、その瞬間いろいろ分かった気になるので、不安が紛れるんですけど、ところが不安の原因はというと心の闇なんです。ところが知識を増やすと闇が増えるので、不安は実は背後で増殖していく、というようなことが起きています。

私も、特に、ジャック・ラカンとか、それを下敷きにしているアレンカ・ジュパンチッチとかスラヴォイ・ジジェクとかの哲学が真実に迫ってるなあ、と学生時代に相当興奮して、あとはテオドール・アドルノとかマックス・ホルクハイマーとかの本もかなり読み漁ったんですけど、面白いですし、相当核心をついているんですけど、どれだけ核心をついていようと、それに興奮して夢中になっているとき、「私の心はどうなっているのか」「欲望によって興奮しているのだ」という単純明快な事実を絶えず見落とし続けているのです。ところが知識を仕入れ

ると、こういうことが分かって、新たなことが分かって新たなことが分かって、不安が解消できている気になってしまうというのが、恐ろしいところで、背後ででも不安は増殖していく…

Q：そうなんですよね。一つ潰したと思っても、また背後からそれに違うような、もっと大きな新たなものが出てきて、いくらやってもきりがないみたいな感じで、漠然とした不安を感じていたのですが、今話を聞いて、非常に腑に落ちました。

A：ええ。そうやって、分かっているつもりなのに、不安を解消しているつもりなのに、何か不安がつきまってくる、というのを漠然と感じておられて、なのでそれを好きははずなんだけど、その道をひたすら歩もうとはしなかった、というのは、ある種自浄作用みたいなものというか、カナリア？洞窟に入っていくときに、カナリアが危なくなりかけて、「あ、危なくなりかけてるな」と教えてくれる機能みたいなのがちゃんと生きているので、あるところ以上、踏み入れなかった、というようなことだと思えますね。「こうしたい、ああしたい」「これが好き、あれが嫌い」とか思っていることの他に、そのカナリアの機能のこのほうを大事にしてあげると、道を仮に踏み外しかけてもそれ以上は踏み外さずにすみます。本当にもし、読むのが好きなら、書店に売っている難しい本もいいんですけど、己の心の中に、刻一刻変わっていく、今を教えてくれるこの心の中の煩悩とかいろんな感情、過去からの累積した膨大な書物が埋まっていて、光を当て始めると、どんどんいろんな、内面に隠されている「書物」が読めるようになってくるので、それがまあ、本当にある意味で言うと、奇想天外でめっちゃくちゃ面白いので、そっちの図書館にこもったほうが、

Q：そうですね。

A：はい、お勧めです。

(テープ起こし：e)